

新潮文庫

エミリーの求めるもの

モンゴメリ
村岡花子 著



新潮社



エミリーの^{もと}求めるもの

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 赤113 O

昭和四十四年四月二十五日 発行
昭和五十二年十一月三十日 十四刷

訳者 村岡花子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

◎ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Midori Muraoka 1969 Printed in Japan

新潮文庫

エミリーの求めるもの

モンゴメリ
付岡花子訳



新潮社版

1870

エミリーの求めるもの

第一章

1

高等学校の年月をうしろにし、永遠の未来を自分の前にして、エミリーがシュルーズベリーからニュー・ムーンの家へと帰ってきたとき、彼女の日記には、「もうケンブリック茶とは、おわかれだ」と書かれた。

これは一種のシンボルだった。エリザベスおばさんが、エミリーにほんとうの紅茶を飲むことを許したのは——それもおりおりの特別のおふるまいとしてではなく、あたりまえのこととして——それは無言のうちに、彼女の成人を認めたのである。ほかの人たちは、もうしばらく以前からエミリーの成人を認めていた。ことに、いとこのアンドルー・マレーと友人のペリー・ミラーはとくにそれを認めて、すでに求婚までしたのだが、ものの見事にはねつけられてしまった。これをエリザベスおばさんが知ったとき、もはやエミリーにケンブリック茶ばかりをあてがっているべきではないと悟った。けれども、そのときでさえ、エミリーは絹のストッキングをはくことを許されるだろうという希望は持てなかった。絹のペチコートは、煽情的の衣きぬずれの音は起しても、かくれているものだから許されるかもしれない。けれども、絹のストッキングとなった

ら、それは不道德である。

こうしてエミリーは、彼女を知っている人々によって知らない人たちに向って、何となく神秘的な調子で、「あの娘は書くんですよ」とささやかれた。そしてニュー・ムーンの「ご婦人方」の一人として受入れられた。ニュー・ムーンという所では、エミリーが七年前に来たとき以来、何一つ変らなかつた。ここへ来た最初の晩、喜び眺めたサイドボードの上のエチオピア人の彫刻の飾りが、壁に奇妙なシルエットを投げかけているのもすっかり同じだつた。遠い昔に生命の全盛時代を持った古い家は、それゆえにこそ、今はたいへん静かで、賢く、そしてやや神秘的にいた。またすこしきびしかったけれども、非常に親切だつた。ブレア・ウォーターとシュルーズベリーのがある人々は、若い娘にとっては無気力な場所であり何の変化もない将来であると言ひ、せつかく、ミス・ロイアルがニューヨークの「雑誌社の位置」を与えてくれたのをことわつたのは愚かなことだと言つた。有名になるあんなすばらしいチャンスを投げすてるとは！けれども、将来どんな自分を作りだすかについて、非常にはつきりした考えを持っていたエミリーは、ニュー・ムーンの生活をつまらないとも、またそこにとどまることをきめたのでアルプス登山のチャンスを失つたとも思わなかつた。

彼女は神聖な権利によつて、古代の高貴な話^{ストーリー・テラーズ}し手の階級に属していた。数千年も早く生れていたなら、彼女は一族と共にたき火をかこんで、輪の中にすわり、聴き手を魅了しつくしたかもしれない。時代の先端に生れた彼女は、たくさんの人工的の媒体^{メディア}を通さなければ、聴き手に届くわけにはいかない。けれども、物語を織りだす材料はあらゆる時代と場所と同じである。生れ

ること、死ぬこと、結婚、醜聞——この世界でほんとうにもしろいことはこれだけである。そこで、彼女は強い決意に燃えて、勢いよく名誉と幸運を求めて仕事を始めた——このどちらでもないあるものをも求めていた。なぜかと言うと、エミリー・バード・スターにとっては、書くことは、もともとこの世の榮えや月桂冠を意味してはいなかった。それは彼女が是が非でもしなければならないことだった。その美醜にかかわらず——一つのことから、一つのアイデアは——それを「書きだして」しまふまでは、彼女を責めさいなんだ。生れつきユーモラスでドラマティックだったので、人生の喜劇や悲劇は彼女を有頂天にさせ、ペンをとおしてそれを表現させずにはおかなかった。現実とただひとえの幕でへだてられて横たわっている埋もれた、しかし不滅の夢が、よみがえりと解きあかしを求めて——そむくことのできない声で——彼女を呼び求めている。

エミリーはただ生きていることだけで、青春のよろこびに満たされていた。人生は永遠に楽しく、彼女をさきへさきへとさしまねいていた。前進には苦しい闘いがあることは知っていた。たえず彼女に追悼文を書いてもらうことを頼みに来るくせに、もし耳慣れない言葉を使いでもしたら、たちまち彼女を見くだして、「いやに偉そうなことを言っている」とそしるブレア・ウォーターの隣人たちをいつもおこらせていることを知っていた。原稿返却の手紙も山と積まれることも知っていた。自分には書けない、いくら努力してもむだだという絶望におそわれる日のあることもしっていた。編集者が好んで使う「特にわるいというわけではありませんが」という文句が、おそろしく神経にさわって、マリー・パシカートセフのまねをして、人をバカにしたようにカチ

カチと容赦なく時をきざんでいる居間の置時計を窓から投げつける日もあることを知っていた。やって来た、またやろうとしたことが、何もかも失敗に見え——むだでバカバカしいことに考えられる日のあることも知っていた。人生の詩の中にも小説と同じような真実があるという彼女の強い信念にさえも、不信をいだきたくなるような日も来るであろうことを知っていた。あんなにも喜んで聴き入った神々の「おりおりの声」が、人間の耳やペンが届くことのできない完全さと美しさを示すのみで、彼女にはとても得られないものとしてあざけり、侮るあなどであらうことも知っていた。

エリザベスおばさんは、彼女の書きぐせを許しはしたものの、決して賛成してはいないことも知っていた。シュルーズベリー高等学校での最後の二年間に、エミリーはエリザベスおばさんをとほうもなく驚かせて、詩や物語で原稿料をかせいだ。そこで許可が得られたのだ。けれども、マレー家にはいまだかつてそんなことをした人はなかった。もう一つには、エリザベスおばさんには仲間はずれにされることをひどくきらいな性質があった。エリザベスおばさんは、エミリーがニュー・ムーンプレーア・ウォーターからは別の世界を持っていることを、ほんとうに立腹した。星空のように輝きわたった王国、そこへエミリーは思うままにはいることができ、どんなに疑いぶかい、憎らしいおばさんでもついてはいけなかったのだ。もしエミリーの眼があればほど夢みるような、美しい秘密を追っているかに見えるなかつたなら、エリザベスおばさんももう少しエミリーの野心に同情を持ってくれたかもしれない。わたしたちはだれだって、あれほど自分に満足しているニュー・ムーンプレー一族でさえも、仲間はずれにされるのはきらいだ。

2

ニュー・ムーンとシュルーズベリーの年月をエミリーといっしよに歩んできた読者たちは、エミリーがどんな様子をしている娘か、かなりよくわかりだと思ふ。（『可愛いエミリー』と『エミリーはのほろ』参照）はじめて彼女に逢う人々のために、今、だれの眼にも魅せられたる十七歳の門出と見える姿で、こがね色にはえる秋の海沿いの、菊の庭を歩いているところを、わたしは描きたい。あのニュー・ムーンの庭は平和の場所である。ゆたかな官能的の色彩と、不思議な精神的の陰影に充ちた、魅せられた樂園である。松とバラのかおりがその中にあった。蜂のうなりと、風のうめきと、青いアトランティック湾のささやき、そして、その北にあたるところの、のっぽのジョン・サリバンの「やぶ」の中のモミの木々の柔らかな歌声が、四六時中絶えなかったのだ。エミリーはそのなかのあらゆる花、あらゆる影と音を愛した。そこそその周辺に立っているすべての美しい古木——ことに、自分が熱愛している木々——南の隅の野生のサクラのひとかたまり、ロンバードの三人の王女たち、小川の道に立っている一本の乙女のようなアンズの木、庭の真ん中の杉の大木、ずっとさきへ行ったところの銀色のカエデと松の木、もう一方の隅で、いつもにぎやかなそよ風に媚態を見せているネムの木、そしてへのっぽのジョンのやぶに並ぶ一列の頑丈な、白ブナの木々を愛した。

エミリーは木のたくさんあるところに住んでいたことを、いつも喜んだ。長い以前に死んだ手によって植えられ、育てられた、古い、先祖代々の木々、その下陰には、彼らの生涯の喜びや悲

しみのすべてが宿っていた。

ほっそりした、若い乙女。黒い絹のような髪の毛。灰色を帯びたむらさきの眼、スミレ色の影をその下にたたえていたが、それはエミリーがエリザベスおばさんのきらう、罪深い時間を過して物語を完成したり、筋の輪郭を作ったりしたあとでは、いっそう暗く、人を惑わすような具合に見えた。真っ赤な唇の両隅にはマレー一族に共通のしわがあった。ややさが尖った耳。たぶん、その口もとのしわとこの耳が、ある人々に小ネコを思わせたのかもしれない。あごとくびの美しい線、いたずらっぽい微笑、ゆっくりと花ひらくかと思っっているうちに、突然パツと咲く輝き。プリースト・ポンドの口のわるいナンシー・プリーストおばさんが賞めたことのあるかかと。ふっくらした頬のうすいバラ色は、おりにふれてほのかに燃えた。この変貌を起すものはあまりたくさんはなかった——海から吹き寄せる風、丘に浮ぶ突然の青い光、ほのおと燃えるケシの花、朝霧の中を港から出ていく白い帆、月光の下に銀色に輝く湾の水、古い果樹園のブルーのつる草。あるいは、のっぽのジョンのやぶから聞えるある人の口笛。

これをみんないっしょにして——綺麗なのかしら？ わたしには言えない。ブレア・ウォータの美人コンクールには、エミリーの名は挙げられなかった。けれども、彼女の顔を一度見た人は、決して忘れなかった。エミリーに二度目に逢った人は決して、「お顔はわかってるような気がするのですが——どなただったでしょう！」とは言わなかった。彼女の背後には、数代の美しい女たちがいた。この祖先たちはみんな彼女のパーソナリティーに何かを与えた。彼女は流れる水のしとやかさを持っていた。そのまばゆさと単純さも彼女にうつっていた。一つの思いが浮

ぶと、それは強い風のように彼女をゆすぶった。一つの感情は彼女を、まるで嵐がバラの花をゆすぶるように震わせた。生は力のみちみちた、死ぬなどということはあり得ないように思われる、野生のいきものの一つが彼女であった。実際的な、常識的な一族を背景にして、その前に彼女はダイヤモンドのほのおのように輝いていた。多くの人たちが彼女を好きであり、また多くの人が彼女をきらった。彼女に対してまったく無関心であるということは、だれにもできなかった。

エミリーはまだほんとうに小さかったころ、メイウッドの古い、小さな家に父親といっしょに暮していた。そこで父は死んだのだが、あるとき彼女は虹の終るところを捜しに出かけたことがあった。期待と希望に胸をとどろかして、長い、ぬれた野道や丘を行った。けれども、走っているうちに、すばらしい虹のアーチはうすれた——かすかになり——消えてしまった。エミリーはわが家がどっちの方向にあるのかもわからない、見知らぬ谷あい、たった一人でいた。瞬間、唇はふるえ眼は涙でいっぱいになった。やがて顔をあげ、からっぽになった空に向って雄々しく笑った。

「またほかの虹が出てくるわ」と言った。

エミリーは虹を追う者であった。

3

ニュー・ムーンの生活も変った。エミリーはそれに自分を合わせなければならなかった。ある

さみしさも耐えていかなければならない。楽しかった七年間の友イルゼ・バンリーはモントリオールの「文学と表現の学校」へ行ってしまった。二人の娘は乙女時代の涙と誓いで別れた。二度とふたたびまったく同じ立場では相逢えない二人だった。なぜなら、どうかくそうとしてみても、二人の友達が——最も親しい友達でも——親しければ親しいほどかもしれない——が別れていてふたたび逢うときには必ずあの冷たい、大なり小なりの変化があるのだ。どちらの一人も、相手をまったく同じだとは思えない。これは自然のことであり、どうにもならないのだ。人情というものはたえず進むかしりぞくかしている——決して静かに止ってはいない。けれどもこの道理が全部わかってはいても、わたしたちの友達が決して前とまったく同じではないことを発見したとき、何となく戸惑ったような失望を感じない者があるだろうか——よしんば、その変りかたが進歩の方向であるにしても、やはりいくらかの淋しさはのがれられない。エミリーは、経験の少なさを補う、不思議な「直感」でイルゼが感じないこのことを直感してしまった。そして、考えたかたによっては、イルゼはニュー・ムーンやシュルーズベリーの年月には永久に別れを告げてしまったのだと感じた。

イルゼは腹をたてたが、エミリー自身は、はねつけながらも一筋の希望は持たせなくもなかった。ペリー・ミラー、元はニュー・ムーンの「やとい人」ではあったが、シュルーズベリー高等学校の模範生であった彼は現在ではシャーロットタウンのある事務所で働いており、将来にいくつかの輝く法律的名誉を志していた。虹の果てだの神話の金の壺だのはペリーは望まない。彼は自分の願っているものは動かずに待っていることを知っており、必ずそれに到達しようと決心して

いた。まわりの人たちも彼に期待しはじめてきた。つまるところ、エーベル法律事務所の書記と、カナダの最高裁判所の席とのあいだの、へだたりは言ってみれば、現在の書記と港のそばのストーブパイプタウンの素足の小僧とのへだたりと、同じものだった。

デディ・ケントのほうには、虹を追う者の要素がもつとあった。彼もまた、去ろうとしていた。モントリオールのデザイン学院へいくのだった。彼も知っていた——もう長年知っていたのだ——虹を追う者の歓喜と迷いと絶望と苦痛を知っていた。

彼が立っていく最後の夜、すばらしい北国の長いそがれを、スミレ色の空の下の新・ムー・ムーンの庭をそぞろ歩きしていたとき、彼はエミリーに言った。

「よしんばぼくらがそれを捜せないとしても、それを捜すことの中に、^{みいだ}見出すことよりも、もつとましのことがあるよ」

「だけど、わたしたちは捜しだすわ」エミリーは「三人の王女」の一本の上に輝いていた星を見上げながら、言った。デディの「ぼくら」という言葉が意味するあるものが、彼女にしびれるような喜びを与えた。エミリーはいつも自分に対して正直であった。デディ・ケントは自分にとって世界中のだれよりもねうちのある者だという意識に眼を閉じようとはしなかった。けれども彼女は——彼にとって彼女はどんな意味を持っていただろうか？　少しかしら？　たくさんかしら？　それとも何でもないのかしら？

彼女は帽子をかぶっていなかった。そして髪に星のような黄色い小菊のかたまりをかざしていた。その日彼女は着物のことをかなり考えた末に、このプリムローズ色の服にきめた。彼女は自

分の姿に満足していた。けれども、もしテディが気がついてくれなかったら、そんなことは何でもないのだ。テディはいつでもエミリーを当然の者として受取った。それはエミリーにとっては恨めしいことだった。ディーン・プリーストなら気がつくだろう、そして適当な賞め言葉^はをささげるだろう。

「さあ、ぼくにはわからないね」テディはトパーズ色の眼をしたエミリーのネコのダフィーが茂みの中でトラになったつもりでいばって歩いているのを、にらみながら言った。「ぼくにはわからない。実際にかかってみると、ぼくは——まったく無力の感じだ——ことによると、ぼくには何にもねうちのあることはできないかもしれない。少しばかり絵がかけたって——それがなんになるんだ？ 夜中の三時に眼をあけてるときには、ことにそう思うよ」

「ええ、わたし、その感じはわかるわ」とエミリーが言った。「ゆうべ、わたしは創作で大苦しみしたのよ、何時間も何時間も苦しんだあげく、自分には何一つ書けないという絶望に達したの——いくらやってみたってむだだってね——ほんとうにねうちのあることなんてできっこないっていう結論に達しちゃったの。わたしはその気分^{とこ}で床について枕^{まくら}を涙でびしょびしょにしたわ。夜なかの三時に眼がさめたときには泣くこともできなかったわ。涙は笑いと——野心とも——同じようにばからしいことに思えたの。わたしはまったく自信も希望もゼロになってしまったの。それからね、わたしはうすぐらい明け方のつめたい中で起きだして、新しい物語を始めたのよ。夜なか——の——三時の感じでああなたの魂をくもらしちゃだめよ」

「困ったことに、三時は毎晩あるんだ」とテディが言った。「あの不気味な時間には、ぼくはき

まっであんまり大きな望みを持つと何にも得られないと思っちゃうんだ。ぼくがおそろしく望んでいることが二つあるんだ。一つは、もちろん、大美術家になることだ。ぼくはね、自分を卑怯者だとは、絶対に思わなかったよ、エミリー。だけど、今は、怖くなった。もし成功しなかったら！ 世間の物笑いになるばかりだ——母はだめだと思ったよと言うだろう。きみも知ってるとおり、母はぼくの行くのがいやでたまらないんだ。出かけていってそして失敗するなんて！ それだったら、行かないほうがましだ」

「そんなことないわ」エミリーは熱情をこめて言った。言いながらも頭のうしろのほうで、デディがそんなにおそろしく望んでいるもう一つのこととは、いったい何だろうと考えていた。

「ねえ、デディ、怖がっちゃだめよ。とうさんがね、死ぬ晩にわたしと話したときに、わたしはどんなことをも恐れちゃいけないとおっしゃったのよ。エマーソンだったでしょう、『いつでもあなたが行くことを恐れていることにぶつかれ』って言ったのは？」

「ぼくが思うには、エマーソンは自分がなんにも怖いものがなくなったときに、そう言ったんだね。武装を解くときには勇敢になれるものだよ」

「あなたはわたしがあなたの力を信じていることを知ってるでしょう？」エミリーはやさしくささやいた。

「ウン、知ってる、きみとカーペンター先生。ぼくの将来を信じてくれるのはきみたち二人きりだ。イルゼだってペリーのほうがぼくよりも家へベーコンを持って帰るのは確かだと思っているんだからね」